

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 24 日現在

機関番号：32510

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00584

研究課題名(和文) 拘束的モダリティ形式の使用と不快さの関連性に関する対照研究

研究課題名(英文) A contrastive study of the connection between the use of the deontic modality and discomfort

研究代表者

平 香織 (Taira, Kaori)

神田外語大学・外国語学部・教授

研究者番号：40389614

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：朝鮮語は上位者に対する敬意を言語化することが厳しく求められる言語である。本研究は、そのような朝鮮語において、下位者が上位者に行為を促す際に、義務や許可といった拘束的モダリティ形式を使用できる点に着目し、こうした言語使用がなぜ上位者に不快感を与えないのかを考察することを目的とした。さまざまなジャンルの資料を用いて朝鮮語の当該形式の使用を記述し、その結果を日本語と対照することで拘束的モダリティ形式の使用に関する両言語の違いを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

聞き手にある行為を要求する際、日本語では不快感を与える可能性があることから拘束的モダリティ形式の使用を避けようとする。一方、朝鮮語では相手の利益になる行為であれば、当該形式を問題なく使用できる。配慮を言語化し、敬語を有する点など文法的類似性の高い日朝両言語間においても、このような差があることを示した本研究の結果は、言語形式の使用と不快感との関連性は、文法的類似性の高さとは異なる別の視点で考察する必要があることを示したと言える。また、両言語のこうした違いを示すことは、コミュニケーション上の摩擦を回避するために必要であり、外国語教育への貢献が期待できるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The Korean language requires the use of expressions of honor toward superiors. This study aims to examine how a subordinate can use deontic modality (obligation, permission) toward a superior to make them act. This study describes the usage of deontic modality in Korean through data drawn from various genres and indicate differences in the usage of the deontic modality between Korean and Japanese.

研究分野：朝鮮語学

キーワード：朝鮮語 拘束的モダリティ 不快感 対照研究

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) cal ceu -sye -ya toy -yo.

副詞 混ぜる - 尊敬 - 義務 - 聞き手敬意

「?よくおかき混ぜにならなければなりません。」

上記は店員が客に商品(飲み物)を渡す際に義務形式を使用した朝鮮語の例であるが、日本語では(1)のような状況で義務形式を使用することはない。使用しない理由を社会言語学的な観点から述べれば、客と店員の間の力関係に差があることを基本とした言語行動をしている(東 1997)ためであり、モダリティの観点から述べれば、義務は相手に行為を強制することを意味し、客に対して失礼となるためである。朝鮮語でも客と店員の間には力関係が存在し、それに基づいて言語行動を行う点では同じである。それだけでなく朝鮮語では、聞き手敬語法の 6 分類に代表されるように、年齢や社会的な上下関係によって使用する言語形式が決められているところがあり、下位者は上位者に対して失礼にならないことば遣いをすべきであるという意識が強い。

では、なぜ朝鮮語では(1)のように、義務や許可といった形式を下位者が上位者に対して使用できるのだろうか。

## 2. 研究の目的

言語形式の使用と不快感の関連性を調べるために、まず、朝鮮語における拘束的モダリティ形式の使用実態を明らかにすることを目的とした。さまざまなジャンルの資料から多くの例文を収集し、一定の指標を基に分類・考察することで、なぜ当該形式の使用が上位者に対して許されるのかという問いに対する答えを導き出すことを目指した。そして、その結果を基に、朝鮮語の拘束的モダリティ形式に相当する日本語の形式と対照し、両言語の使用の違いを明らかにしようとした。朝鮮語の拘束的モダリティ形式が使用される場面で、日本語ではどのような表現が使用されるのか、また、日本語で拘束的モダリティ形式が使用されるのはどのような場面なのかを考察し、両言語の違いを示すことを課題とした。

## 3. 研究の方法

朝鮮語の拘束的モダリティ形式がどのような状況において、誰が誰に対して使用できるのかを把握するために、シナリオやコーパスを用いて事例を収集した。そして日本語の形式と対照するにあたり、朝鮮語から日本語に、日本語から朝鮮語に訳されている小説、朝鮮語と日本語で書かれた同一製品の取扱説明書、朝鮮語と日本語で提示された公的機関における案内文・告知文などの資料を収集し、分析を行った。なお、収集した資料は、今後も継続的に活用できる形で電子化した。また、朝鮮語の当該形式の類似表現との違いを明らかにするために、韓国語母語話者を対象としたアンケート調査を実施した。

## 4. 研究成果

朝鮮語の義務形式‘-ya hata/toyta’の使用について(1)-(3)の観点から考察した。

### (1) 聞き手が行為者となる場合の行為の実現と話し手・聞き手の(不)利益との関連性

「行為の実現が聞き手に利益となる場合」には、尊敬形‘-si-’を用いることで、上位者に対しても‘-ya hata/toyta’が使用できる。上位者に対する使用では、行為を強制するという解釈よりも聞き手の利益を考えているという解釈が優先されるために、失礼に当たらない。「行為の実現が話し手に利益となる場合」には、話し手と聞き手との間で、行為に関わる情報が共有されているという話し手の想定のもとに使用される。話し手は、聞き手との間にある共通理解を前提として、‘-ya hata/toyta’を使って行為要求をするが、共通理解はあくまでも話し手の想定であるため、それが成立しない場合には、要求された行為をなぜ遂行しなければならないのかと聞き手が尋ねる場合が見られる。「行為の実現が話し手および聞き手の利益・不利益に関係のない場合」には内輪における規則を提示する場合、親しさの表現、意図的に相手を不快にさせる時にも使用されることを指摘した。

### (2) 取扱説明書・案内文・告知文に用いられた‘-ya hata’と対応する日本語の表現形式

取扱説明書や案内文、告知文で使用される‘-ya hata’の使用例を必須条件と可能になる事態に着目して分類した。その結果、‘-ya hata’の使用には【A】読み手の意図や目的を実現させるための条件を提示する、【B】望ましい事態を実現させるための条件を提示する、【C】特定の事態を持続させるための条件を提示するという 3 つの場合があることが明らかとなった。この結果を基に、日本語を観察した結果、日本語では、行為の実行を促す際には「おすすめする」「～(て)ください」「～(て)いただく」の形式を使用し、読み手の負担となる行為を要求する際には「お願いする」、あるいは、既定の事項として示す「～です」や「～となる」を使用することが確認できた。そして日本語の「～なければならない」の使用は、条文や約款でのみ観察され、主語が明示され

た「～は...なければならない」という構造で現れることが明らかとなった。

(3) 日本語から朝鮮語，朝鮮語から日本語に訳された小説を通して見る義務形式

両言語の翻訳本を通じた観察から，‘-ya hata/toyta’が「なければならない」に対応するよりも「なければならない」が‘-ya hata/toyta’に対応する割合が高いこと，‘-ya hata/toyta’も「なければならない」も当為や義務を表す点では変わらないが，「なければならない」は課される義務やあるべき姿の理由や状況が明確でなければ，使用されにくいことが分かった。

上記のほか，朝鮮語の拘束的モダリティ形式に関わる類似形式について考察した。日本語の「～ばいい」に当たる‘-myen toyta’と‘-myen cohta’については，‘-myen’に前接する文法要素と，‘toyta’，‘cohta’に後続する文法要素に着目して用例を分析することで，この2つの形式がどのような状況で使用されるかを論じ，違いを明らかにした。‘-ya haci(yo)’，‘-yaci(yo)’については，コーパスを用いた頻度調査と韓国語母語話者へのアンケート調査を行った。‘-ya haci(yo)’は‘-yaci(yo)’に比べて出現頻度が著しく低く，聞き手を主体とした場合にはほとんど使用されない。そして‘-ya haci(yo)’が使用される場合には，説明調で語られるという特徴が共通して見られることを指摘した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 平 香織	4. 巻 16
2. 論文標題 朝鮮語のIl-myen toytaとIl-myen cohtaの意味と用法 - 実現形式に注目して -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 韓国語学年報	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 平 香織	4. 巻 31
2. 論文標題 'III-ya hata' と「なければならない」の対応・非対応 - 翻訳本を用いて -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Lingua	6. 最初と最後の頁 127-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 平 香織	4. 巻 15
2. 論文標題 共起関係から見る 'III-ya toyta' と 'I-ci anhumyen an toyta' の違い	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 韓国語学年報	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 平 香織	4. 巻 8
2. 論文標題 案内文・告知文に現れる朝鮮語の 'III-ya hata' とそれに対応する日本語の表現	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 朝鮮語研究	6. 最初と最後の頁 79-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平 香織	4. 巻 30
2. 論文標題 現代朝鮮語における 'III-ya haci(yo)' と 'III-yaci(yo)' の違い : コーパスとアンケート調査に基づいて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Lingua	6. 最初と最後の頁 49-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 平香織	4. 巻 29
2. 論文標題 先行用言と後行用言から見る '-l pa' の特徴 : コーパスおよびアンケート調査に基づいて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Lingua	6. 最初と最後の頁 83-100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 平 香織
2. 発表標題 朝鮮語の '-myen toyta' の意味と用法 - 「~ばいい」との対照から -
3. 学会等名 名古屋大学・東北大学ワークショップ 言語学と言語教育学 (LEAP) : 理論と実践, そして応用へ
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平香織
2. 発表標題 現代朝鮮語の当為表現 '-ya toyta' が使用される状況の分類 - 聞き手が行為者の場合を中心に -
3. 学会等名 第42回 社会言語科学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------